

JELA NEWS

ジェラ ニュース 第15号 2008年4月15日発行 発行責任者 古川文江

日本福音ルーテル社団 〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26 Tel.03-3447-1521 Fax.03-3447-1523 jela@jela.or.jp www.jela.or.jp 口座番号 00140-0-669206 加入者名 日本福音ルーテル社団

難民支援/アジア子ども支援/ブラジル子ども支援/ボランティア派遣/リラ・プレカリア(祈りのたて琴)研修講座/奨学金制度/宣教師支援

社会に出ていき 手をさしのべる

「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが乾いていたときに飲ませ、
旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれた。」
マタイによる福音書 第25章35～36節



カンボジアでワークキャンプを実施!

10月17日から26日にかけて、一般参加者4名(JELC室園、大森、天王寺、大岡山教会の会員)にスタッフ4名が加わり、カンボジアでワークキャンプを実施しました。参加者は、JELAが建築費の一部(2万ドル)を支援した完成目前の小学校のペ

ンキ塗りを手伝うと共に、ポル・ポト政権下の遺物であるキリング・フィールドや拷問博物館を訪問しました。カンボジアの悲惨な歴史と現状を目にして参加者はどのような感想を抱いたのか、4ページ以下にレポート(抜粋版)を掲載します。

【この号にはこんな記事が】 JELAハウスで生活する難民(櫻井美香)など……2 第5回世界の子ども支援チャリティコンサート開催要領……3 カンボジア・ワークキャンプ参加者レポート……4 ブラジルの二つの建築支援(古川文江)……6 バングラデシュの高校生からの便り……7 JELA歴史コラム(長尾博吉)……7 お知らせ……8

JELAハウスで生活する難民

NPO法人・難民支援協会 生活支援担当 櫻井美香

JELAハウスには、母国での迫害を逃れ、日本での難民認定申請の結果を待ちながら厳しいストレスのもと生活している難民が多くいます。そのなかで、今回はアフリカ出身の難民と中東出身の家族を紹介したいと思います。

■夜間中学に通うアフリカ出身難民

2006年の夏頃より、JELAハウスにお世話になっているアフリカ出身のAさんは、2007年の春から夜間中学で勉強をはじめました。母国では小学校低学年までしか教育を受けることができなかったそうです。

「教育は私の将来にとって、とても大切で必要なものだと思います。でも私は貧しい家で育ったので、きちんとした教育を受けられませんでした。だから、日本でそのチャンスを与えられて、とても感謝しています。」

難民支援協会(JAR)は彼の難民認定手続きや生活の支援をするかたわら、本人の希望により、都内の学校を紹介しました。私たちは定期的にAさんと面談をしていますが、学校に通い始めてからの彼の変化には、すごく驚かされています。以前は、極度のストレスから口数も少なく、イライラしていることも多かったのですが、現在は本当に学校が楽しいようで、JARでの面談の合間にも、日本語のドリルを開いて勉強しています。彼は周りの環境の変化とともに自分の内面の変化も感じています。

「日本に来た初めの頃、いまの学校に通う前は日本語も全然分からなくて、毎日がとても大変でした。でも学校に通いだしてからというもの、私の人生は変わりました。学校に行く毎日がとても楽しい。先生はとても優しく、たくさん良いアドバイスをしてくれます。クラスメートにも大変恵まれています。今では学校が、日本での厳しい生活のストレスを発散できる場であると同時に、元気づけられる場所なのです。」

日本に住む難民は、経済的にも困難な状況におかれています。そのため、彼のわずかな生活費から毎日学校に通うための交通費はとても捻出できませんでした。そこで、通学定期券をJELAにご支援いただけることになり、彼は安定して学校へ行けることになりました。JELAハウスという住まいと定期

券の支援に対し彼はとても感謝しており、今ではJELAが自分の”Home”であり、JELAのスタッフの方々は”Family”だと語っています。

また、将来の希望について、以下のように語ってくれました。

「自分のように困っている人たちのために働きたいです。世界には困難な状況にある人たちがたくさんいます。JELAやJARのような団体の一員として、自分の経験を活かしながら支援活動をしていきたいです。」



日本在留特別許可を得た喜びの報告を聞く櫻井さん(右)

■支援者に支えられる中東出身難民

中東出身のBさん夫婦は2人の幼い娘とともに、2007年夏からJELAハウスに住み始めました。それまでは地方都市に在住していましたが、仕事が安定せず、病気がちの妻の医療費も滞納していたので、職探しのために知人を頼って一家で関東地方へ出てきました。しかし、なかなか仕事が安定せず、家賃も支払えない状態に陥ってしまったため、JELAハウスにお世話になることになったのです。引越後もBさんはほぼ毎日職探しに出かけていますが、月に数日しか仕事を得られない時もあるそうで、一家の生活が苦しい状態であることには変わりありません。「東京に出て来てからというもの、仕事や医療に関しては、もしかすると以前よりも状況が悪くなったかもしれません。このような生活のなかで、JELAハウスに入居させてもらったことに本当に感謝しています」とBさんは話します。

最近Bさんの妻の体調が芳しくなく、JARでは病院へ同行することもあるのですが、顔を合わせるたびに、小学生の長女を預かってくれている母親の友達の話や、家族を支えてくれている支援者の皆さんの話などをし

てくださいます。「今の生活はとても苦しいけれど、ここ(東京)ではJELAや周りの支援者の方がとても親切にしてくれます。」

現在もBさんは、家族を支えるための仕事を毎日探さざるをえない状況にあります。「母国の状況や日本の難民制度などについて言いたいことや思うところはたくさんあるけれども、家族を食べさせていかなければならないから、今ほとにかくがんばります」と話すBさんから、その表情は硬いながらも、生活を立て直そうとする想いが伝わってきました。

[註] JELAハウスでは外務省、難民事業本部、UNHCR、そして関連NGOから紹介を受けた難民申請者とその家族をお預かりしていますが、居住者に対しては役所等での手続き時の立会い、病院へ同行しての説明等、細かい支援作業が必要となりますので、これについてはその多くの部分を難民支援協会(JAR)にご協力をいただいています。

JELAハウスの家族を 東京ディズニーランドに招待!

JELA難民支援部門コーディネータ
森川博己

「メイク・ア・ウィッシュ」という団体をご存知でしょうか。「3歳から18歳未満の、難病と戦っている子どもたちの夢をかなえ、生きる力や病氣と闘う勇気を持ってもらいたい」と願って設立された(<http://www.mawj.org/b.html>)組織です。その活動を記した本で、子どもたちを東京ディズニーランドに連れて行く話を読み、心を動かされました。そして、ひらめいたのです! JELAハウスの子どもたちにも、ディズニーランドは心躍る場所ではないだろうか。

現在、ハウスには二人の幼い姉妹が両親と一緒に暮らしています。下の子は4月から板橋区の小学一年生で、お姉さんとは二つ違い。さっそく「ディズニーランドに行きたい?」と聞いてみたところ、「ほんとう!!」と喜びの声が返ってきました。今までどうして思いつかなかったのでしょうか。自分に興味がない世界とはいえ、子どもの心に鈍感すぎたこ

とを反省しました。二人がハウスにいつまでいるかわかりません。ストレスのたまる毎日に少しでも安らぎを与えたいのです。子どもが喜ばば親も嬉しいはず。12月が近づいていたこともあり、クリスマスプレゼントとしてディズニーランド招待を即断しました。

数週間前から連絡を取り合い、「待つ喜び」も味わってもらいました。家族と電話連絡をしてくれた職員から、「子どもたちは今

だに信じられないようで、毎日ディズニーランドの話ばかりしているようですよ」との報告をうけ、自分のことのように嬉しかったです。当日浦安の地で撮影した、喜びと満足感にあふれた二人の写真をとくにご覧ください。家族が難民認定されたときには、この写真以上の笑顔が見られることを期待し、四人のために祈りました。



第5回「世界の子ども支援チャリティコンサート」開催要領

● テーマ

Helping Children in Need

餓えや病気に苦しむ子どもたちに愛と希望を!

● 主催

日本福音ルーテル教会・世界宣教委員会/

日本福音ルーテル社団(JELA)

● 協賛団体(順不同。一部交渉中)

三井ホーム株式会社/フェリシア/石橋葬儀社/株式会社ハリファックスアソシエイツ/前田建設工業株式会社/株式会社西村建築設計事務所/有限会社リフォーム・イクエ/精文堂印刷株式会社/小林商事株式会社/株式会社ケン・コーポレーション/シュローダー投信投資顧問株式会社/野村證券株式会社/株式会社建吉組/株式会社細田工務店/アメージング・グレイス/泰成印刷株式会社/有限会社タジリ住宅建設/株式会社ソニック・オクムラ/ルーテル教会「共に生きる」集い/株式会社WING

● 日程・会場

5月16日(金)午前10時 日本福音ルーテル蒲田教会
 16日(金)午後7時 日本福音ルーテル田園調布教会
 17日(土)午後7時 日本福音ルーテル栄光教会
 藤枝礼拝所
 18日(日)午後2時 日本福音ルーテル京都教会
 19日(月)午後7時 日本福音ルーテル西宮教会
 20日(火)午後2時 日本福音ルーテル・シオン教会
 徳山礼拝所
 22日(木)午前10時半 玉名ルーテル幼稚園
 23日(金)午後7時 九州ルーテル学院大学チャペル(有料)
 25日(日)午後1時半 日本福音ルーテル保谷教会
 *開場は上記の30分前。入場無料。ただし席上献金あり。

● 演奏予定曲目

ベートーヴェン: ヴァイオリン・ソナタ第5番「春」作品24
 モーツァルト : ヴァイオリン・ソナタ第34番K378
 サン・サーンス、サラサーテ、クライスラー、ブラームス等の小品
 *曲目は都合により変更になることがあります。

● 演奏者プロフィール

◆ シーグフリート・テッパー氏 (Mr. Siegfried Tepper)

ピアノ・パフォーマンス修士。ドイツのオペラハウスで研鑽を積む。モーツァルト室内管弦楽団音楽監督兼指揮者として十数年間勤務。

◆ クリスター・テッパー氏 (Mr. Christer Tepper)

シーグフリート氏の息子。4歳でヴァイオリン演奏を開始。奨学金を得て米国の音楽大学で学んだ後、ドイツやイタリアに留学。

● 献金の用途

JELC連帯献金/小学校の椅子・机・学用品・児童用衣服等の配備支援(カンボジア)/病院の医療機器の搬入とその使用法訓練のための経費(インド)/子どものストリートチルドレン化防止活動支援(ブラジル)/小・中学校の教育支援(バングラデシュ)/子どもをなくした家族のカウンセリング支援(日本) その他
 *以上のいずれか、またはすべてに捧げます。

● 問い合わせ総合窓口

日本福音ルーテル社団(JELA)
 150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26
 電話:03-3447-1521/ファックス:03-3447-1523
 E-mail:jela@jela.or.jp

第5回世界の子ども支援チャリティコンサート

SIEGFRIED & CHRISTER TEPPER
 シーグフリート & クリスター・テッパー

● 日程・会場
 5月16日(金)午前10時 日本福音ルーテル蒲田教会
 16日(金)午後7時 日本福音ルーテル田園調布教会
 17日(土)午後7時 日本福音ルーテル栄光教会藤枝礼拝所
 18日(日)午後2時 日本福音ルーテル京都教会
 19日(月)午後7時 日本福音ルーテル西宮教会
 20日(火)午後2時 日本福音ルーテル・シオン教会徳山礼拝所
 22日(木)午前10時半 玉名ルーテル幼稚園
 23日(金)午後7時 九州ルーテル学院大学チャペル
 25日(日)午後1時半 日本福音ルーテル保谷教会
 *開場は上記の30分前。入場無料。ただし席上献金あり。

主催 日本福音ルーテル教会・世界宣教委員会/日本福音ルーテル社団(JELA)



カンボジア・ワークキャンプ参加者レポート



出会いという財産

山田麻衣(室園教会)

空港に着いたとたん、熊本の雨上がりのような蒸し暑さに迎えられました。これから、何が私を待っているんだろうと、期待で胸がいっぱいだったことを今でも思いだします。このワークキャンプの参加を決めてから、たくさんの人に“カンボジアに行くなんてすごいね”って言われました。周りからの期待と、自分自身が何かをつかみたいという焦りとプレッシャーの中で、このワークキャンプに参加しました。日本に帰ってきた今、キャンプを振り返ると、自分が予想していたより遙かにすばらしい経験ができました。

カンボジアで見て、嗅いで、聞いて、触れて、感じたすべてのことが私の財産になっています。しかし、そのなかでも、一番の財産は、人々との出会いです。街で乗ったトゥクトゥクのおじさんから、ワークをした小学校で出会った人たち、LWFのスタッフの方たち、そして、一緒に旅を共にした仲間まで、カンボジアで関わったすべての人が、私の財産となっています。

このワークキャンプでは、世界規模のNGOであるLWFの活動についての話を伺うことができました。For the people, With the people, By the people (人々のために、人々と一緒に、人々によって)というビジョンを持って奉仕や、支援に取り組む姿勢に、神様の大きな力を感じました。実際に、LWFが援助している村の小学校でペンキ塗りのワークをさせてもらいました。私は、80%好奇心でカンボジアに来た日本人でしかありません。しかし、村の人たちは、私たちを本当に心からもてなしてくれました。私たちが戸惑いを覚えるほどに。“こん

にちは”と“ありがとう”しかカンボジア語を話せない私と、一生懸命コミュニケーションをとろうとしてくれました。子どもたちからカンボジア語のレッスンを受れたり、折り紙を教えたり、みんなでトラックのピックアップに乗ってキャーキャー叫びながら移動したりしました。私たちは奉仕をしにきた、つまり与える側なのに、逆に村の人たちから多くのものを与えてもらいました。村を離れるときも、たった1日ちょっとのワークだったにもかかわらず、村の人が全員来たんじゃないだろうかと思ってしまうほどの人たちが、さよならを言いにきてくれました。子どもたちは、いつも笑顔でした。いつも一生懸命でした。私はその姿に自分の日本での生活を重ねて、いかに毎日感謝をせずに生きていたかを思いました。私は村の人たちと子ども達の笑顔に、また来ようと強く思いました。



他者への愛

秋久 潤(大森教会)

世界には、様々な形の飢えがあると思います。食べ物に飢えている人もいれば、愛に飢えている人もいます。日本でも、「生きる目的が見つからない」「自分の居場所が見つからない」「自分には何もできない」といった精神的な飢えが、至る所に満ちているような気がします。

今回のワークキャンプは、「自分が将来、何を与える人になりたいのか」を考える、良い機会になりました。カンボジアには、ゴミ集積所で廃品回収をする人たちや、物乞いの人たちが大勢いました。その人たちに対して自分は何ができるのか考えていたのですが、具体的な方法は思いつきませんでした。ワークキャンプだけで「貧困」や「援助」のす

べてを知ることは難しく、あくまでも「学びのスタート地点である」という印象を受けました。

開発途上国に対して、私たちができることは何でしょうか？ お金を寄付するのも良いですし、NGOに参加するのも良いと思います。その他にも、祈ることや、「今やっていることに一生懸命取り組む」ということが求められていると思います。具体的には、学生の方は将来、開発途上国に還元できるくらい(それこそ先生として教えられるくらい)いまやっていることを学んでほしいと思います。社会に出ている人は、自分のスキルを他の環境でも活かせるよう、専門分野以外のことも学んでほしいと思います。

日本人は勤勉で、戦後まれに見る経済発展を遂げました。しかしその後、自分たち以外(よその国)に対する無関心さから、世界で孤立しはじめています。同じ「勤勉さ」でも、「自分たちのため」から、「他者と共に生きるため」へと、意識改革が求められているように思います。

私たちに一番求められているのは、他者に対する「愛」です。無関心から抜け出して、少しでも「知ろう」とすることが、愛の始まりではないでしょうか。私は、今回のカンボジア・ワークキャンプによって、愛すべき対象が見えてきました。



伝えることの大切さ

諸正義彦(天王寺教会)

夜、プノンペン空港を出たとたん押し寄せる熱気、詰めかける客引きのタクシードライバーで騒然としていた。我々を乗せた車は質の悪いアスファルトを走り、東南アジア独特の光景であるバイクの群れのなか、ホテル

に向かった。日本では考えがたいが信号はない。夜が明けると、当然のように重く暑い空気が押しかかる。首都プノンペン。近代的なビルが少し、すさんだ建物。また、フランス領地時代を思わせる様式の建造物があり、まとまりのない顔をしていた。街中は目をまわすぐらい往来するバイクであふれ、オレンジの袈裟を纏った僧が念仏を唱えている。観光客が行く場所には物乞いの子供たちや、傷痍軍人と思われる人が悲しい目で訴えてくる。

今回、我々はプノンペンだけにとどまらず各地に行き、LWFの活動する小学校建設の現場や日本人ボランティアが活動する現場に行き、現状を見てきた。また博物館やアンコール遺跡にも行き、カンボジアの歴史にも触れた。もちろん行く先々で現地の人々とも触れ合った。触れ合った人々はみな優しい。おおらかで明るく、茶目つきがある人々だった。小学校建設の場では、彼らと共に働き、同じ釜の飯を食べ、一緒に笑い、踊ることもあった。彼らと分かち合った時間すべてが忘れることのできない大切なものだ。

先に書いたように我々は様々な地へ行った。そこで目の当たりにしたのが貧富の差だった。とても同じ国内とは思えない生活格差。映画のセットのように、表面だけ見栄えよくしているようであった。しかしその裏では、その日その一瞬の生活に困っている者が多く存在した。自分が日本に住んでいるから、彼らのことを必要以上に蔑んで見ていたのかもしれない。もちろん自分たちの手で改善に努める者もいた。

しかし日本では、カンボジアのことをあまりに知らな過ぎる。貧しい生活のなか苦しんでいる人々のことに、興味を持たな過ぎ

る。私は今回参加し、自分の無知に改めて気づき、自分の知ったことを伝えてゆきたいと思った。自ら現地で彼らのために活動するのが良いのかもしれない。しかし私は、カメラを通して得たものを多くの人と分かち合いたい。写真を見た人が、カンボジアを通して少しでも世界のことを考えるようになったらどれだけ良いだろうと思う。私がカンボジアに行つて得たもの。もちろん多くのことを思い、考え、学んだが、自分にとって一番は、伝えるということの大切さである。



時をわかち合う素晴らしさ

松岡あゆみ(大岡山教会)

いざ、小学校へと向かっていると、雨でぬかるんだ地面がホイップクリームのようになり、多くの車が立ち往生していました。日本だと、そこでイライラしてストレスが溜まると思います。しかし、カンボジアの人たちは平気です。しょうがないな〜というようにエンジンを止めて、思い思いに時間をつぶし始めました。ゆで卵を食べる人や近くのお店に立ち寄る人、昼寝をする人もいれば、散歩をする人。ゆつくりと時間が過ぎていくのを感じました。

ずいぶん遅れて小学校に到着してみると、あふれんばかりの人が集まってくれていま

した。こんなに歓迎されたことがあつただろうかというほどに暖かく受け入れてもらいました。日本語はもちろん、英語さえも通じない中、身振り手振りでペンキ塗りをしました。ここでもカンボジアの人は焦ることなく作業をしていて、日本がどれほど時間というものに縛られているのかわかりました。ワークをしたのはほんの短い時間で、きっと私たちが行かないほうが作業が続いたのではないかなあと思うぐらい、何も出来ずに終わってしまいました。しかし最終日、挨拶をしに小学校までいってみると、どこから持ってきたの!? というぐらい巨大なスピーカーが用意されていて、大音量で音楽がなっていました。野外ダンスホールの出来上がりです。村中に響くぐらいの爆音の中、子供たちやおじいちゃんと踊ったり、笑ったり、転んだり。楽しくて楽しくて、ありがたい気持ちでいっぱいになりました。お別れのとき、笑顔で別れるつもりだったのに涙が止まらなくなりました。

今回のキャンプでは毎朝、その日のフレーズが決まっていました。私が一番心に残り、その後の日々もずっと考えていたことがあります。「分かち合うこと」です。これは小学校を去る日の言葉でした。おやつを分かち合う場面もあれば、ものを分かち合う場面もたくさんありました。どれも大切なことですが、わたしは「時を分かち合うこと」の素晴らしさに気づきました。作業をしている時、ダンスをしているとき、ご飯を食べているとき、一緒に笑っているとき。分かち合うには、必ず相手が必要です。簡単だけど、難しい。一人でご飯を食べたり、一人で泣いたり、一人で踊ったり。どれも一人ではさびしいことです。私はそのことに日本では気づきませんでした。単純で簡単なことに見えるけれど、実は一番難しいことなのかなあと思いました。



ブラジル子ども支援プロジェクト – 2つの建築支援

JELA事務局長 古川文江

ブラジル・日本両国のコラボレーション

JELA NEWS第13号(2007年8月15日号)で Centro Diaconal Evangelico Luterano(CEDEL:福音ルーテル・ディアコニアセンター 写真右下)の校舎建築計画についてお知らせしましたように、ブラジルのルーテル教会信徒の熱い祈りによって発足したCEDELはその許容量が90名と限られており、設立以来、働きの拡張を祈り求めてきました。その祈りがポルト・アレグレ市政府に届き、2004年にCEDELは市政府より隣接する広い土地の供与を受けました。早速CEDELは屋根付きの運動スペースを整え、次に第二校舎建築計画に取り掛かりましたが、問題は資金でした。

2006年8月、JELAはそのようなCEDELの願いを知り、日本政府の「草の根・人間の安全保障無償資金協力」へ申請することをCEDELに提案し、即、その準備に取り掛かりました。2007年4月、JELAはCEDELの役員を「在ポルト・アレグレ出張駐在官事務所」に取り次ぎ、CEDELは正式に「草の根」への申請手続きを開始しました。

そして、祈りつつ待つこと8ヶ月間。ついにCEDELの建築計画が日本政府により「草の根」の対象案件として採択されたという知らせが届き、2007年12月18日、ポルト・アレグレにてCEDELの理事長と日本領事との間でその調印式が執り行われました。

CEDELの建築総額が約1,360万円であるのに対し、日本政府が提供する資金は1千万円です。この建築が未完成とならないために、JELAは不足する資金の3分の1(約120万円)の負担を日本政府に約束しました。残りの3分の2はポルト・アレグレ福音コミュニティ(CEPA)が拠出を約束しました。

これは、実に二つの国の善意が結実する画期的なできごとです。なぜなら、ポルト・アレグレ市政府が供与した土地の上に日本政府が校舎を建て、そしてさらにその校舎建築の完成をブラジルと日本のキリスト者が保証するからです!

ジアデマ集会所・青少年センター

現在の福音ルーテル南米教会ジアデマ

集会所はとても狭く、30人も入れれば身動きができません。数年前、ルーテル教会の一信徒の献財により、近隣に土地を取得することができました。以来、ジアデマ集会所は、献金やバザー等により建築資金を蓄えてきました。

1階に礼拝堂とキッチンと集会スペース、2階に教室を備えた新しい集会所が完成すれば、現在行っている大型バスのチャーター(ジアデマから南米教会の教会学校へ子どもたちを移送すること)は必要なくなり、加えてバスに乗り切れない子どもたちの教会学校参加も可能になります。またイースターやクリスマス等の教会の諸集会や結婚式や葬儀のほか、青少年センターとしてのさまざまな教育・福祉活動にも利用できます。

総工費が750万円のところ、ジアデマ集会所が現在用意する資金は250万円です。この建築の必要性と意義を認めるJELAは、2008年度と2009年度の2度に分けて総額

250万円を支援することを決定しました。サンパウロ市政府から建築許可が下り次第、必要な部分から徐々に建築を進めていく計画です。

どうぞCEDELとジアデマ集会所の建築計画を覚え、ご支援くださいますようお願いいたします。

2007年度支援活動報告

イースター献金送金(7件)	1,218,925円
JELC/JELA共同プログラム南米教会子ども支援	1,200,000円
クリスマス献金送金(7件)	771,552円
合計	3,190,477円

2007年度寄付金収入

延べ177名から	3,333,665円
----------	------------

以上ご支援を心から感謝してご報告申し上げます。



Bangladesh の高校生からの便り

JELAはさまざまな人たちに奨学金を提供しています。日系人教会の牧師となるため神学校で勉強しているブラジル人、農業技術の研修を受けるため来日しているアジア出身の人、アフガニスタン復興に役立つ知識と技能を求めて海外の大学院で学ぶ日本人、難民認定を受けて日本の大学で学習する人など、支援対象は多岐にわたります。みんな、自分の出身国や世界の平和と発展のために勉強に打ち込んでいる方ばかりです。

ジェラニュース11号(2006年11月発行)でご紹介した、Bangladesh の高校生二人から最近便りが届きました。彼らの熱い思いが実現するようにと願います。

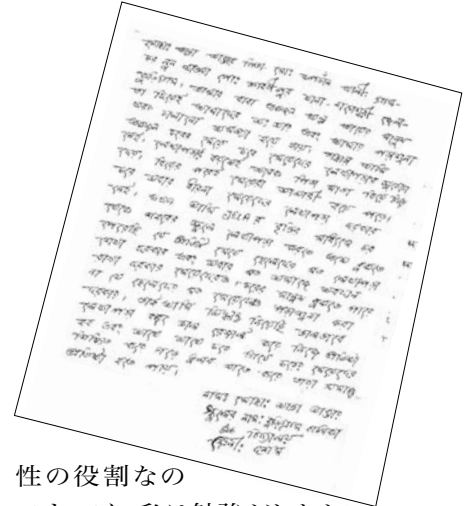
Mr. Zakir Hossainさんからの便り

私は村の中学を卒業して、いまは都会の高校に通っています。毎日の暮らしが大きく変わりました。都会は生活環境がよく、学習設備も整っています。私の出身地Charは想像できないほど不便なところです。勉強した

くても、なんの設備も教材もありません。都会で学べるようになって、少しずつですが、いろいろなことがわかってきました。充実した教育設備が必要です。一人ひとりの人間を尊重し生命を大切にしなければなりません。生活の質を高めることも重要です。でも、こういったことは、JELAから奨学金をいただいて高等教育を受けられるようになったからこそ、わかった事柄です。わたしが高校で学ぶことが、自分とまわりの人々の生活を良くするために使えればと思っています。学校を卒業したら故郷にもどります。そして、何も知らない子どもたちを教えるつもりです。私はみんなの生活をより良いものに変えたいです。そのために自分が役に立ちたいです。この希望をいつまでも忘れずに、生まれ故郷に貢献できるようにがんばります。

Ms. Anna Akhterさんからの便り

私はCharという村の貧困家庭に生まれました。そこではみんな、女に教育はいらないと思っています。結婚して家庭を守るのが女



性の役割なの

です。でも、私は勉強がしたかったです。そして、JELAの奨学金のおかげで、都会の学校に通えるようになりました。ほんとうに幸運です。村から町にやって来て、女性も男性と同じように教育を受けて、重要な仕事を任せられる必要があると、つよく感じました。私はここで一生懸命勉強して、たくさんの知識を身につけるつもりです。故郷に帰ってからは、弱い立場にある女性たちの教育に特別に力をいれます。地域の人みんなが教育を受けられるようにしたいです。教育こそ地域の発展を支えるものであること、いまそのことが、よく理解できました。私の夢が実現することを信じています。

日本福音ルーテル社団(JELA)創立百周年を迎えるに際して

JELAは2009年6月21日に法人設立百周年を迎えます。そこで、JELA自身をよりよく理解して頂くために、その歴史の中に含まれる様々なエピソードをピックアップし、その背後の状況を説明することでJELAの歴史をクローズアップできればという思いから、今回から「JELA歴史コラム」を連載します。執筆者は長尾博吉・JELA常務理事です。

「JELA歴史コラム」その1

最初の日本語訳聖書を刊行したルーサーン

JELAとは、Japan Evangelical Lutheran Association のイニシャルですが、アメリカ福音ルーテル教会の日本における福音宣教の担い手(後述の通り)であったのです。

歴史的には、ルーテル教会による日本宣教は、1892年2月アメリカ合衆国南部一致福音ルーテル教会伝道局が、日本宣教を決断し、先ずシェラー宣教師を日本に派遣したことに始まると言われています。

この時期は、諸外国のプロテスタント伝道会社(Mission)の日本宣教に立ち後れること約20年と言われています。よって我が国の主要地域には外国伝道会社が既に多くの宣教師を送り込み宣教活動を活発に展開していました。

しかし、世界のルーテル教会が、公式に我が国に宣教師を派遣し、福音宣教の業を展開したことについては、確かに他者の後塵を拝しましたが、非公式にあるいは個

人的には、世界のルーテル教会の我が国への関わりは、比較的早期であったと考えられています。

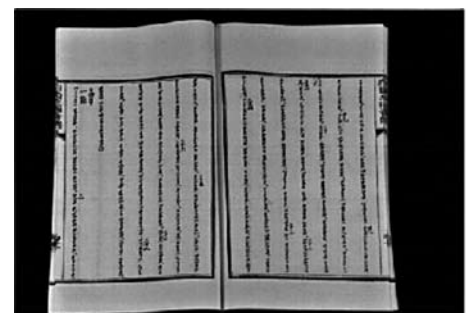
例えば、ドイツ福音ルーテル教会に属していたカール・ギュツラフ(1803-51)がロンドン伝道会社より宣教師として、順次にハワイ、バンコック、中国に派遣されていましたが、彼が次の宣教地として日本宣教を志していた時、マカオで3人の日本人漂流民に遭遇しました。彼は、この3人の太平洋漂流日本漁民から、その世話をしつつ日本語を習い、1835年に『約翰福音之傳』(ヨハネ福音書。写真参照)をシンガポールで刊行したのです。これが日本語に訳された最初の「新約聖書」であったのです。このことはキリスト教の日本宣教史においては記憶すべき事柄であります。

更には、1870年頃来日したと推定されるドイツ福音ルーテル教会所属のボルシャルト(Dr. Burchardt)宣教師が、1876年にヘボン訳ヨハネ福音書9章をローマ字によって凸版印刷し、盲人伝道に貢献したことが記録に止められています。彼は、楽善会訓盲

亜院(官立盲学校の前身)の設立に尽力し、日本における盲人教育の先駆をなした人物です。

このように、全世界に多くのキリスト信徒(約7千万人)を擁するルーテル教会はナショナル教会のみならず、伝道協会を通し、更には個人においても世界の福音宣教に多くの貢献を果たしてきているのです。

JELA(日本福音ルーテル社団)は、その中であって、アメリカの福音ルーテル教会の日本における福音宣教の担い手として、1909年に日本の民法に基づく宣教師社団の認可を得て、以来百年、我が国における福音宣教に従事してきたのでした。



『約翰福音之傳』

第2回リラ・プレカリア(祈りのたて琴)研修講座 ハーブ・レッスン始動!

2008年度リラ・プレカリア研修講座が4月から本格的に始まりますが、一足早く、ハーブ・レッスンが2月14日よりスタートしました。受講生のほとんどがハーブ未経験で、興奮と緊張につつまれながら、一生懸命練習していらっしゃいます。これから18ヶ月の厳しい特訓が始まりますが、受講生の方々の上にたくさんの恵みがもたらされますよう、皆さまお祈りください。今後の受講内容につきましては、随時お知らせいたしますので、お楽しみに!

本講座で使用するテキストの一つ『ハーブ・セラピー』(ステラ・ベンソン著、神藤雅子訳、春秋社2007年発行、CD付)が好評発売中です。これは、病む人の病床でのハーブの即興的演奏の指導書、ヒーリング・ミュージックを生演奏するためのガイドブックです。JELA事務室に在庫がありますので、購入ご希望の方はご連絡ください。
(中島 愛)



ジェラ・ミッションセンター・ホールでハーブ・レッスン中の受講生。
左から3番目は本講座講師の一人である神藤雅子氏

聖書人形展を開催

4月2日～4日、ジェラ・ミッションセンターで聖書人形展を開催しました。展示された人形は、近畿福音ルーテル教会タイ宣教師・杉岡直樹師夫人の広子さんの作品です。昨夏に同様の人形展が神戸で催された際には、「多くの人に驚きと感動を与えた。絵画や彫刻に劣らない描写。そこに現れた信仰の深さ。涙を流す見学者もあったほどだ」(クリスチャン新聞2007.8.19号)と報じられました。この催しとJELAのリラ・プレカリア(祈りのたて琴)については、テレビ福音番組「ハーベスト・タイム」が将来とりあげる予定です。番組を制作・放映しているハーベスト・タイム・ミニストリーズは、聖書をじっくり学ぶ「ハーベストフォーラム東京」<http://www.harvesttime.tv/HarvestForumTokyo/index.htm>を、毎週(日曜午後・月曜午前)JELAのホールで行っています。ノンクリスチャンにも分かりやすい、教派を超えた集会です。興味のある方はぜひお立ち寄りください。

支援者一覧

(2007年10月1日～2008年2月29日)

● 各プログラム支援献金
 アクストン・ケビン/浅見正一・君江/尼嶋治/アメリカ福音ルーテル教会複数信徒/荒井悌次郎・和子/有坂敬臣・日出子/安藤淑子/池谷節子/石井千賀子/石川史志/石澤とし子/石田浩子/石橋葬儀社/石原勇/石原寛/市ヶ谷教会婦人会マルタの会/伊東節子/井上握子/井上新/浦和ルーテル学院/江澤妙子/大分教会/大岡山教会小学科/大塚真佐子/大野英雄・久子・利恵・良・秀/岡部瑞子/小川晶人/小川幾代/乙守望/乙守ミチ子/柿沢純江/加藤俊輔/兼岩恵美子/河野精一郎/菊池杏子/京谷信代/京都教会/清田純次/釧路教会/倉重ミドリ/神水教会/恵泉幼稚園/児島和子/小宮一道/西条ルーテル幼稚園/桜井永之/島宗正見/下関教会婦人会/周田裕芳/白髭市十郎/尻無浜紀美子/菅原晴子/杉浦りえ/鈴木やす/鈴木連三/聖ペテロ教会/聖望学園/関本憲弘/高杉勝美/竹森洋子/田中美紗子/谷川陽子/谷口恭教/玉名教会/玉名ルーテル幼稚園/短期宣教師一同/筑田充子/堤重敏/田園調布ルーテル幼稚園/田園調布

ルーテル幼稚園フィリア会/鳥居和代/中金律子/中川浩之/中川陽子/中村孝治・敬子/西一郎/西恵三・知恵/西立野園子/西平薫/日本ルーテル教団関東地区婦人の集い/野田マサ子/芳賀明子/芳賀美江/萩原孝亮/箱崎教会女性の会/長谷川美恵子/早瀬康平/原田恵美/日野原万記/兵藤真理子/平林洋子/深川育子/福田陽子/藤橋日出子/淵田康穂/ベンケ・パトリック/保谷教会/本郷教会学生センター/増子美文/増島俊之/益永和代/三嶋統吾/水野豊子/南節子/稔台教会婦人会/むさしの教会/宗方美代子/村上裕子/むろいともこ/森保宏/森田雅子/八坂由貴子/安井則夫/山県順子/山口美子/山崎恵美子/山崎克子/山本一男/山本了/米田就子/ルーテル学院幼稚園/若原奇美子/渡辺高伸/渡辺伸宏/Augustana Lutheran Church 他匿名複数名

● 賛助会費

赤間峰子/浅見正一・君江/尼嶋治/荒井和子/石澤とし子/井上摩記/梅田満枝/大澤朝子/小川晶人/乙守望/乙守ミチ子/浦田ルーテル教会女性の会/倉知延章/小坂敦子/坂根信義/坂本照光・陽子/桜井永之/佐藤玲子/下関教会婦人会/高橋佳子/高橋悠美子/瀧原哲/竹森洋子/中村桂子/西恵三・知恵/原田恵美/淵田康穂/益永和代/松隈貞雄/矢田恵子/山崎恵美子/ 他匿名複数名

以上、敬称略。ご協力ありがとうございました。

なお、匿名をご希望の場合は、ご送金の際にお知らせ下さい。

編集後記

『天のふるさと』というCDを聴きながら書いています。ふるさと(故郷)……懐かしく、胸に迫る言葉です。妻を亡くして悲嘆にくれていた音楽評論家・吉田秀和が、元気になって初めて出す本のタイトルは『永遠の故郷』。「神の国」を表す正宗白鳥の言葉だそうです。最近わたしは母を亡くしました。召天前日に、ずっと探していた本が見つかりました。A・E・マクグラスの『信仰の旅路くたましいの故郷への道』です。信仰告白をしたことのない母は、いま「たましいの故郷」にいらっしゃるのでしょうか。JELAはいろいろな支援活動をしています。何をやるにしろ「たましいの故郷」を示せる機会を大事にしたい、と自らの体験を通して感じました。(M)

JELA
 Japan Evangelical Lutheran Association
 日本福音ルーテル社団